

# 諏訪湖の水域変遷判明

## 県環境保全研 信大と共同研究



堆積物の調査で、過去の環境の変遷が判明した諏訪湖

県環境保全研究所は22日、信州大学との共同研究により、諏訪湖の面積が最終氷期最盛期では現在よりも小さく、最終氷期末の1万6000年前から6000年前の縄文時代にかけては現在よりも大きかったことが分かったと発表した。諏訪盆地の堆積物を初めて解析し、数千年〜数万年のスケールでの内陸盆地における堆積や浸食、運搬の作用を研究するうえで重要な知見となるという。

(林駿汰)

研究グループは2020年春と21年春の2回、諏訪市豊田の湖岸2カ所でボーリング調査を実施し、約300センチ掘削。2万5000年間の堆積物を調査し、諏訪湖の堆積環境と水域の変遷に追った。調査では、氷期の1万6500年前までの堆積物から粗

土砂の供給が1万6500年前から減少していることも分かった。

諏訪地域の植生の変遷をみると、氷期の1万6500年

前までは松やツガ、トウヒなどの針葉樹が多くみられたが、その後は植生遷移の初期にみられる先駆植物がみ

れ、続いて温暖な気候で育つコナラなどに植生が変化していったことが分かっている。

土砂の流入量の減少と植生の変遷の動きが一致していることから同研究所は、「最終氷期後の温暖化により気候変動や植生遷移が起き、流域に

おける土砂の生産が弱まって湖への土砂供給量が減少し、諏訪湖が拡大したと考えられる」とした。

研究成果は、2月9日付で学術誌「Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology」にオンライン掲載された。